

ハンドベルの音色で一年を振り返る

今年も残すところあとわずかとなりました。校長室にある月ごとのカレンダーも残り一枚です。思い起こせば、今年は、日本の気象観測上、最も暑い夏を過ごし、猛暑、酷暑の言葉を耳にしない日々がありませんでした。しかし、止まない雨や明けない夜がないように、暑さが続くことはなく、今では、遠く感じるほど、寒さが日に日に身に染みてきます。

また、校内では、師走を表すように先生方が慌ただしい毎日を過ごしており、年末ならではの景色が見られます。その忙しさの中にあっても、クリスマスや年の瀬の行事など、特別な雰囲気を感じるこの時期、私は、冬ならではの「音」がとても好きです。クリスマスのジングルベルに代表される楽しい音だけではなく、降り積もる雪の静けさを「しんしん」と表現するなど、どれも寒さを感じさせない風情があります。

さて、都内でも数少ない部活動として活躍する本校ハンドベル部は、この時期、地域やイベントへの出演依頼が多くなり、練習にも熱が入ると、ベルの音が冬の到来を知らせているように聞こえています。そもそもハンドベルは、イギリスが発祥で、その昔、教会の塔の鐘で冠婚葬祭ごとに異なるメロディを鳴らすための練習用に考案されたハンディサイズのベルです。その音色は、「天使の歌声」と称されるほど美しく、清らかで透き通った響きがあります。



令和7年12月20日(土)、年末恒例の学校行事、Taisei Art Festival 2025が開催されました。体育館アリーナでは、吹奏楽部、合唱部、ハンドベル部、ギター部、ダンス部、チアダンス部の公演、ホワイエには、美術部、写真部、書道部、華道部、イラスト同好会の作品が展示され、多くの来場者が本校生徒のパフォーマンスに酔いしれました。

本コラムで紹介するハンドベル部が登場すると、透き通るような音が清らかに場内を包みます。ゆったりと響き渡るベルの音に反するように、所狭しと動きながらハンドベルを操る11人の部員の呼吸は、見事に重なり合い、ハーモニーとなって会場の私たちを魅了します。

静寂な中にも、燃えるような生徒の真剣な眼差しが私たちの心を捉えると、透き通った響きが厳しい練習を積み重ねてきた自信とともに、学びの匂いとなって新しい年に思いを馳せる時間を演出していました。そして、生徒の演奏に合わせてハンドベルから放たれる黄金色の光も、街を彩るイルミネーション以上の輝きで幻想的な世界を楽しませてくれました。

冬は、単なる季節の変わり目以上のものを私たちに教えてくれます。年の終わりに向かう時期だからでしょうか、私はハンドベルの音で過ぎゆく年を丁寧に振り返ることができ、演奏後も深い余韻に酔いしれしていました。